

AOSテクノロジーズ ● 代表取締役社長

佐々木隆仁

ソフト開発のスタイルを
抜本的に変える

バックアップやデータ復旧ソフトを開発するAOSテクノロジーグループは、API（アプリケーションプログラミングインターフェース）の流通を促進する「APIbank（エーピーアイバンク）」を立ち上げる。FinTechを巡って銀行のAPIの公開が進み、AWSをはじめとする大手クラウドベンダーもAPIの開放に積極的だ。APIを使ってAIなどのすぐれた機能を探り入れれば、それだけソフト開発の工数が削減でき、アイデアを早く商用サービスにつなげられる。「APIbank」はAPI取引を活性化することで、ソフト開発のあり方を抜本的に変えていくという。佐々木隆仁社長に話を聞いた。

APIバンクの立ち上げで流通網を構築へ

「API」の流通を促進させる取り組みを始めておられます。どういった狙いがあるのでしょうか。

まず、当社グループは1995年の創業以来、パッケージソフトをつくってきました。データの復元や移行、入れ替え、抹消などのパッケージソフトが主力です。データ復元の「ファイナルデータ」は、BCN AWARD 2018のシステムメンテナンスソフト部門で、9年連続9回目の最優秀賞を受賞しています。他にもデータ移行の「ファイナルパソコンデータ」は、国内累計販売本数1000万本を突破するヒット商品です。個人顧客だけでなく、法人顧客にも幅広くご利用いただいています。

ただ、ソフト開発ベンダーとして、このままパッケージソフトだけをつくり続けていよいのだからかと、疑問に思っているのです。つまり、これからのソフト開発はネット上に公開されているAPIを利用することで、もっと短期間に、顧客のニーズに合ったソフト開発が可能になる。

とはいえ、Googleマップのような有名なAPIならともかく、ごく普通のAPIってなかなか普及しないんですね。当社グループでもいくつかAPIを公開していますが、既存のパッケージソフトほどの知名度はない。だったら、自分たちがAPIを流通させる仕組みをつくらうと考えたわけです。その名もずばり「APIbank」です。

—1980年代にパッケージソフトの流通事業を始めたソフトバンクみたいですね。

私たちパッケージソフトベンダーは、全国津々浦々のパソコン販売店に自社のパッケージソフトを置くしてくれる流通の大切さを身にしみてわかっています。今のAPIは流通網の仕組みが整備されておらず、ソフトバンクが登場する以前のパソコン用パッケージソフトのような状態です。APIbankでは、ソフト開発ベンダーやユーザー企業がもつAPIをできるだけ多く登録してもらい、APIを使いたいと考えているソフト開発者に利用してもらう取引所として機能させていきます。

—APIを活用したソフト開発とは、具体的にどのようなものなのでしょうか。

例えば、新しく改正された銀行法では銀行にAPIを開放するよう促しています。これはFinTech産業を育成するため、軌道に乗れば銀行のAPIを使ったさまざまな金融サービスが登場する見込みです。xTechと呼ばれる既存産業とITを連携させて新しいサービスを創出する分野は、API連携が欠かせません。これらAPIでつながった経済圏はAPIエコノミーと呼ばれており、米IBMの試算ですと世界のAPIエコノミーは、今年2兆2000億ドル（約235兆円）規模に拡大するそうです。

バックアップのデータを死蔵させない

—AOSテクノロジーズのソフト開発でも、すでに外部のAPIは活用されているのでしょうか。

当社グループの主力サービスの一つであるクラウドバックアップ「AOSBOX」で、バックアップ先のAWS（Amazon Web Services）のAPIの活用を進めています。AOSBOXのユーザー数は30万人を超えており、AWSでのバックアップ容量は4.5ペタバイト規模。AOSBOXは一部無料で使えますが、パソコンやスマートデバイスのフルバックアップが可能で、有料サービスが全体の6割余りを占めているのが特徴です。一つのサービスでこれだけの容量を使っているのは、日本のAWSのなかでも上位に入ると聞いています。

AOSBOXのサービスラインアップの一つに、アマゾンのAPIから引っ張ってきたAI（人工知能）を使い、高性能な検索をしたり、多言語対応のOCR機能で画像に書かれた文字をテキストに変換。画像と動画を認識して、例えば飛行機が写っている映像があったら、その動画ファイルに「飛行機」のタグをつけて検索を容易にすることなどを実現しています。これらの機能を自分で開発しているのはコストがかかるし、時間もかかってしまう。顧客のニーズに合った機能をすばやく実装できるのがAPIの最大の魅力です。

—バックアップは万が一のためにするもので、平時はただデータを死蔵していることが多い。ならば、そのデータをAPIを駆使して活用してしまおうという発想ですね。本書データを加工するだけで

そう遠くない将来、AIにソフトをつくらせて、必要な機能はAPIでもつくる。朝ひらめいたアイデアが、夕方にはサービスになっている。これも可能になる。



Takama Sasaki

1964年、東京生まれ。99年、早稲田大学理工学部卒業。大手コンピュータメーカーでOS開発に従事。95年、AOSテクノロジーズを設立。代表取締役社長に就任。2000年、ヒット商品となったデータ復元ソフト「ファイナルデータ」シリーズを発表。



はないので、心理的な抵抗も少ない。

そうです。クラウドバックアップを巡っては今年2月、医療システム開発に強いファインデックスと提携して、クラウドバックアップサービスを始めています。ここでも、ただデータを保存するだけでなく、医療分野の専門技術をもつ会社とAPIで連携して、画像やドキュメントの分析といったAI活用を実現できればと考えています。

当社は30万人余りのデータを安全に保管する技術と実績があります。セキュリティをしっかりと担保しつつ、同時にアイデア次第でいろいろなかデータを活用したサービスが、APIを使えば安く、速く開発することが可能になるのです。企業向けでも、個人向けでも、ビジネスの領域は開けません。

挑戦する回数を増やして勝率を高める

—APIの活用が進めば、ソフトウェア開発そのものが大きく変わりそうですね。

クラウド全盛の今、大手ソフト開発ベンダーの多くがオンラインでソフトを販売しています。これも「パッケージソフト」という括りに入れるのであれば、箱に入れて売れるのか、オンラインで売れるのかの違いに過ぎないかもしれません。

パッケージソフトを23年つくってきた当社がいうのも何ですが、パッケージソフトの成功率は正直とても低い。100万本、1000万本のヒット商品に恵まれた当社でさえ、苦労してつくったのに思うように売れなかったことはあります。「売れたらラッキー。売れなかったら仕方がない。また別のソフトをつくるか」ということを繰り返してきたのです。

苦労を重ねて、やっとの思いでつくったのに「売れませんでした」では、経営に深刻なダメージを与えかねません。もし、APIを活用して、従来の10分の1の工数でソフトがつくれるのであれば、同じ労力で10種類のソフトがつくれます。何がヒットするのかの予測は、市場ニーズの移り変わりや、ライバル他社の動きもあって、予測精度を高めるのはなかなか難しいものがあります。だったらAPIで工数を劇的に下げて、数多く挑戦したほうがヒットする確率は高まると思いませんか。——確かに、ソフト開発はすぐれたアイデアが重要だといわれます。ただ、あまりにソフト開発が容易になると、逆に参入障壁が下がすぎて、ライバ

ルが増えることにつながります。

だとしても、それは止められない流れです。そう遠くない将来、残った手組みのソフト開発もすべてAIで自動化できるようになるでしょう。そうなれば、ソフトはAIにつくらせて、必要な機能はAPIでもってくる。「閉じらめいたアイデアが、方方にはサービスになっている」なんてことも可能になる。自分でサービス化せずとも、これまで開発してきたさまざまなソフトをAPIで公開して、サブスクリプション（継続課金）型の収益モデルの比率を高めることも容易になります。

——ソフト開発の工数を減らす時代から、アイデアを生み出す創造的な競争へとより一層変わるわけですね。

「アイデア」というものが、人間の既存の知識の組み合わせでできているとすれば、恐らく組み合わせを得意とするAIが代行する可能性すらあります。どのAPIをどのように組み合わせれば、市場のニーズに合ったソフトウェアサービスがつくれるか。そういった課題は、AIに必要な市場データとAPIとを渡し計算させれば、ひょっとしたら人間より予測精度の高い商品がつくれるようになるかもしれません。

だとしたら、なおさらソフト会社としては、より上流に位置するAPIの開発に軸足を移したほうが、将来の成功の可能性は高まります。こうした動きが世界規模で起こっている今だからこそ、当社はAPIを軸にソフト開発のあり方を抜本的に見直し、次の成長へとつなげていく考えです。

眼光紙背

APIを積極的に使うことで、ソフト開発の手法は抜本的に変わる。ここにAIが加われば、手作業でプログラムを積みまくる時が本当にやってくるかもしれない。他々本館社長は、「ソフト開発におけるシミュラリティ（技術的特異点）は近・将来に訪れる」と予測している。

では、ソフト開発がAIに完全に取って代わるかといえば、「そうはならない」とみる。その理由は「すぐれたアイデアや

発想は、往々にして人間の幸福感和密に関係する」からだという。しかも、自分の幸福感ではなく、「誰か、大切に思う人の幸福感を高めようとするときにモチベーションが最大限になる」。

この考えは、技術者であった父親から受け継いだもの。「誰かを幸せにしたい」との思いが強ければ強いほど、すぐれたアイデアを生み出しやすいとの教えが、将来のソフト開発につながる道徳になっている。（完）